

創造性と人格に関する文献的研究

田 辺 敏 明

序

創造性は知能と異なり、情意的な影響を受けやすいとされており、特に動機づけと関連が深く、全人格的な反応と考えられている。

また、創造性に関しては、潜在的にすべての人が持っているが、何らかの環境要因によってその出現を阻止されているとする考えもある。従って、オープンスクールの例のように、禁示的雰囲気を除いて創造性の出現をはかる試みもあり、一方、創造性の訓練に関してもその必要性が唱えられている。従来までブレインストーミング、チェックリスト法、KJ法等が考案されている。

創造性が促進されるか否かの鍵を握っている環境要因は他にも多く考えられ、学校教育や両親の養育態度は、年少の段階では特に重要なウェイトを持っている。Torrance(1970)は、5歳と小学校の3,4年生で創造性が低下することを見出し、この時期は発達の新しい段階、教育の推移段階に符号し、新しいストレスやカリキュラムの問題が原因であると指摘している。

以上の所見は、知能がかなりの部分を遺伝に依存しているのに比べ、創造性は環境要因に大いに依存していることを示している。

本稿では、興味や達成動機と創造性の関連に続き、創造的人格の記述さらには創造性と特に関係するとされる人格特性との関連を述べ、人格発達の特性としての自我同一性との関連にまでふれる。次に、人間が社会との相互作用の過程で種々な様相を人格に呈してくることにふれ、学校適応、非行との問題に進む。そして最後に、創造性を阻止したり促進したりする環境要因に目を向け、親子関係、外的ストレスから考察を加える。

創造性と興味

Guilford(1967)の提唱した創造性因子の中に問題に対する感受性(sensitivity)という因子が見られる。また、創造性は、とりわけ独創性は人の考えつかないようなアイデアを思いつく能力とされ、普通の人に興味を示さないものにも興味を示すことも考えられる。例えば、Ward(1969)は、創造力の豊かな幼児は、豊富な刺激を含む環境から遊びへの多くの手がかりを得るが、創造力の乏しい幼児は、いくら豊富な刺激を環境として与えても、それらを手がかりにできないとしており、創造性が興味や知的な好奇心を生み出す源泉であることを示唆している。

ここでは、一般的な興味の広さと創造性の関連というより新奇なものへの親近性、複雑さの嗜好という観点からさぐってみたい。

まず、Silvestro(1977)の創造性と新奇刺激への欲求とに関する研究は以下の通りである。彼は、高創造群と低創造群に、それぞれ、拡散的課題と収束的課題を与えた後に新奇な刺激を求めるか、あるいは平凡な刺激を求めるかを検討している。そして、高創造群は、収束的課題を受けた後に新奇な刺激が得られるキーを求めることが多く、逆に低創造群は、拡散的課題を受けた後に平凡な刺激を求めることが多いことを報告している。この結果は、高創造群が特定の解答を求める圧力に抵抗し、興味の拡散を抑制できないことを示し、一方、低創造群は、多面的な解答

を出すことに苦痛を感じ、概知の平凡な刺激を求めて安定感を得ようとしていると解釈されよう。

また、創造性と刺激の複雑さへの好みとの関連をさぐったRidley (1977)の研究がある。この研究は、創造性の高者及び低者は、複雑な迷路と簡単な迷路のいずれを課題として選択しやすいかを調べたもので、予想としては、創造性の高者は興味の高さという点からも複雑な迷路を選択しやすいと考えられる。しかし結果は逆であり、創造性の高い者は最も簡単な迷路を選択しやすいと報告している。Ridleyはこの結果について、高度に創造的な者は、課題を1つの単位として見なしやすく、それが簡単な迷路の方を選択させたのではないかと考察している。

ここで想起されるのは、ゲシュタルト心理学の代表であるケーラーの洞察学習であろう。洞察学習も、問題場面を全体の場合として見ることであり、その中からひらめきを得られ、問題解決に導かれるのである。

考えてみると、複雑さと言えども、それをどのような操作的定義つまり課題で行うかによっても結果は大いに異なるのではないか。複雑さを左右の非対称という概念で操作的に定義してみると、複雑さの高い方を創造者は選択するであろう。一方、迷路のように、全体として把握した方が解決しやすい場合は、全体把握の可能な程度の複雑度を創造者は好むであろう。

創造性と欲求・動機

創造性は主に拡散的思考や直観的思考を中心に考えているが、広義には、それを創造的所産、業績にまで高める人格特性つまり創造的態度まで含めて定義されることがある。

その創造的態度の中でも達成動機は最もふさわしいものではなかろうか。Kumar & Raina (1976)は、トーランスの創造性テストと文章完成法による達成動機の指標を用い、創造性の高い者は、低い者より有意に高く達成に動機づけられていることを確かめている。

また、Gopal & Sharma & Singh (1980)は、創造性の高者と低者の間で一連の欲求の程度を比較したところ、達成欲求、親和欲求、権力欲求では両者間に有意な差は見られないが、攻撃欲求では創造性の高い者の方が、一方、安定欲求では創造性の低い者の方が高いことを見い出している。興味のあるところで、刺激の非対称性と創造性に関連があることを述べたように、創造性の高い者は、安定感を打ち破ってゆくこと、安定への攻撃に動機づけられていると言えよう。

この点に関して、創造性とリスク・テイキングの関連を調べたGlover & Sautter (1977)の研究をとりあげてみたい。彼は、Wallach & Koganのディレンマ選択質問項目でリスクテイキングの高さを測定し、リスクテイキングの高い者は、柔軟性と独創性で低い者より有意に高い得点を得たことを、さらに低者は具体性において高者より有意に高い得点を得たことを報告している。

以上を眺めてみると、達成動機は創造性と関連が深いと思われるが、とりわけ安定感に満足せず安定を破ろうとする挑戦心、攻撃欲求は、創造者に特徴的な資質と言えるのではなかろうか。

またここで付け加えておきたいのは、達成動機に性差が見られることである。Katz & Poag (1978)らは、「創造的であるように」との教示を与えた場合、男性の方が女性より流暢性の面で秀でていたことを報告している。これは男性の方が達成に容易に動機づけられることを示し、社会的文化的要因が背後に関っていると考えられる。一般に創造的業績が女性より男性に多いのも、このような側面に現れているのではないか。これはさらに社会一般のもつ性役割観とも関係している。

創造的人格

創造性と人格の関連を扱った研究では、大別して創造性と多くの人格変数との相関関係を見る研究と、1つの人格変数を取りあげ、その高低によって群分けし、両群間で創造性の程度を比較する実験的研究に分けられる。

① 相関的研究

最近の研究では、性格特性を因子分析によっていくつかの因子に分け、さらに創造性においてもギルフォードによる創造性因子あるいはトランスの因子を用い、両者の因子間の関連を見る研究が多い。

例えば、Patel(1976)は、創造性尺度としてトランスの創造性テストと伝記的調査による判定を用い、人格尺度としてはキャッテルの16PFテストを用いて両者の関連を求め、さらに創造性の各因子の高低のパターンの違いにより多くの群を作り、それらの群間で人格特性の違いを詳細に記述するまで及んでいる。彼の研究の主要な結果は以下の通りである。柔軟性の高い女性は自己確信的で、一方、伝記的調査で創造性が高いと判断された者は、支配的で冒険好きであったと報告されている。さらに、すべての創造性因子が高い者は、冒険好きで穏やかで自己に自信を持ち情緒的に安定している。一方、すべての創造性因子が低い者は、恥ずかしがり屋であったと記されている。

また、Kaltsounis(1976)は、創造性因子の中でもかなり性格の異なると思われる独創性と具体性をとりあげ、各々と関連する性格特性を抽出している。それによると、独創性とのみ関連する性格特性は、他者のアイデアに対する解放性、手続きや構成に変化を持ちこむ、物事を再構成することを好む、他者の業績に対する批判、賞を与える等であり、具体性と関連するものは、アイデアの連想、美しくユーモラスな側面への興味、新しい法式や所産の造成、手段の豊富さ、多芸、構成能力、知的好奇心、想像力等である。これらの性格特性を比較検討してみると、独創性と関連の見られた特性には、枠を破ることへの欲求がうかがわれ、具体性の関連の特性には、構成手段の豊富さと造成への意欲がうかがわれる。

創造性がアイデアの提出から、それを所産にまで高める過程とすると、独創性に関連する性格特性はアイデアの提出に、具体性の性格特性は所産まで高めることに関与すると言えるのではないか。

② 実験的研究

具体的な研究の紹介に入る前に、まず創造性と人格特性の関連をさぐった代表的な、Gollan(1962)の研究を取りあげ、この研究を基に派生的研究について詳細に述べることにする。

Gollanは、創造性と関連の見られる以下のような特性をあげている。つまり、あいまいさへの寛容とその希求、経験に対する解放性、子どもらしい特性、自己活性化と表出、評価の内的枠、判断の独立性である。

あいまいさへの寛容については、ワラスの創造過程でも触れられており、さらに経験に対する解放性は、ロジャースが提唱したものである。Faschingbauer & Eglevsky(1977)は、独断的な人はあいまいさへの寛容がなく、その点「閉ざされた心」で創造性が低いと述べ、ロジャース

の見解を支持している。しかし、解放性を操作的にどのように定義すべきかという問題も残されている。

次に、子どもらしい特性については、Leiberman (1965)が遊戯性(playfulness)という概念を提唱している。これは、身体的自発性、社会的自発性、認知的自発性、あらわな喜び、ユーモア感から構成されており、創造性との間に正の相関を見い出している。さらに、Couturier & Mansfield & Gallagher (1981)は、ユーモアと流暢性の間に相関を見出し、ユーモアは普通でなく期待しないような連想から生まれ、それがアイデアの飛躍と言える流暢性につながると解釈している。

色々なものに興味を持ち目を輝かせ、自発性が豊かで発見の喜びがあるというような子どもに特有の特性は、創造的人格にすべて含まれるものである。しかし、拙稿(1982)でも述べているように、それが大人になってどのような形で開花するのか縦断的に追跡してみる必要もある。

またマスローやロジャースらの言う自己活性化 (self-actualization) に関しては、Mathes (1978)が創造性との関連を見ているが、有意な関連は得ていない。Mathesの研究では、自己活性化とは、真実、善、美、融合らの変換価値(metavalues)をもつことと概念的な定義をしており、マスローらの言う創造性の最高の体験である至高体験にも通じるものであろう。Mathesの研究で関連が見られなかったのも、ここで測定されている創造性は、狭義の定義の創造的思考であり、それが人格全体的な反応、さらには高い精神性と言える価値志向にまで結びつくとは一概に言えないのではないか。同じ創造性と呼ばれても、特殊才能の創造性と自己実現の創造性を比較すると、前者が、自分自身のみの衝動充足や自律性で特徴づけられるのに対し、後者は、社会的適応と結びついた一種の宇宙との合一感とも言える高い精神性を持ち、かなり次元を異にするのではないか。創造性の概念の広さを認識させられる。

次に、判断の独立性という面では、ウィトキンの場依存-場独立(field dependent-field independent)の概念が代表的であり、これは認知的判断が外的環境に影響されるかどうかの個人差を示したものである。創造性は他者に左右されない比較的独自の行動を生み出すもので、その行動の基礎にも周囲の環境とは独立した認知判断が働いていると考えることによる。

Kinton (1978)は、場依存者-独立者を創造性理論に関連すると思われる適応-変革理論(adaptation-innovation theory)から比較してみたが、両者の間に適応-変革の差は見られなかったと言う。この研究以外でも、創造性との関連は見られないようである。

一方、Bloomberg (1971)や Gaucio (1976)は、場依存-独立と創造性の間には直接の関連は見られないが、両者の関係を媒介する他の介在要因の存在を考える必要性を強調した。彼らは、場を独立的に認知している者でも、可動性(mobility)の高低によって創造性の程度が異なると主張した。可動性とは、因襲的ステレオタイプの思考様式から規格化されない機能に自由に移行できる能力のことである。そして、Bloombergは可動性の高い者と低い者、つまり柔軟な者と固い者との間で創造性を比較したところ、前者の方が有意に高い得点を得たことを報告している。

以上のように判断の独立性の具体例として場依存-独立の特性をとりあげたが、次にそれと関連するものとして評価の内的枠という側面から、locus of controlを具体例としてあげてみたい。

locus of controlは、統制の位置の理論と呼ばれるもので、事の成行きや成功失敗の原因を自己の内的条件に帰する内的統制型と、逆に、事の成行きの原因を自己以外の外的条件に帰する外的統制

に分類する理論である。

Cohen & Oden (1974), 及び Poole, & Williams & Lett (1977) の研究では, 創造性と locus of control の間に有意な関連は見られない。しかし, Ducette & Wolk & Friedman (1972) は, 内的統制群の方が創造性は高いと報告し, 見解が一致していない。

Cohen らの研究は, 被験者が幼児という発達の未分化な者であり, さらに研究によって用いる創造性テストも異なり, 文化社会的な背景も異なり, 今後の検討が必要である。

創造性と自我同一性

創造性の高い者は, 安定を好まず, 自分自身あるいは外界に対し革新的であることは前にも述べた。また, 外界を変革しようと確信するためには, 自分にも確信を持っていなければならない。つまり, 自分に対してあるいは自分自身が生み出したものが, 正しく価値があると確信し, 自分の意志のおもむくままに課題に没入し, 外からの批判的判断に抵抗するなどの特性を持つのである。一方, これらの特性は自我強度と呼ばれる特性の中にも同様に見い出せる。これらの関連を明確にしようと試みた Lett & Williams & Poole (1979) は, バロンの E スケールを自我強度の指標として用い, 創造性の高群及び低群に実施し, 自我強度を比較したが, 予想に反して有意な結果は得られなかった。

一方, 自我と関連して, エリクソンの自我同一性と創造性の間には, いかなる関連が見い出せるであろうか。Dellas (1978) は, 創造的人格と自我同一性を以下のような相違点をあげて区別している。

- ① 創造的個人は, グループアイデアとの一致感情やグループ同一性を経験していない。
- ② 創造的個人は, 人格の統一性を経験しない。
- ③ 創造的個人は, 過去と現在と将来の連続性を経験していない。
- ④ 創造的個人は, 自己の明確な記述を経験していない。

彼は, 以上のように創造的人格は同一性の最適感覚と調和しないことを主張している。しかし, また創造的人格は, 同一性拡散状態とも区別されているとしている。

以上の見解を部分的に支持する研究報告もある。Maxwell (1978) は, 大学で専攻をすでに決定している学生, 模索中の学生, 未決定の学生の間で創造性を比較したところ, 模索中の学生が最も高かったことを見い出している。自己の役割の可能性を固定せず, 色々試してみる状態の方が創造性は高いと言えよう。

創造性と親子関係

子どもの思考の偏狭さは, 心の閉鎖性 (closed mind) から生まれてくると思われるが, その閉鎖性の形成には, 親の養育態度, 中でも禁止的態度や逸脱行動に対する威圧が大いに加担しているであろう。

養育態度という面からは, 特に母親の影響が大きいであろう。Bishop & Chance (1971) は, 親の概念体系の具体性 (concreteness) — 抽象性 (abstractness) が子どもの潜在的な創造性にどのように影響を及ぼすかを調べ, 母子関係にのみ有意な関係を得ている。つまり抽象的な概念体系を持つ母親は, 家庭環境で遊戯性を促進しており, その子どもの潜在的創造性も高いとしている。

さらに、母親に関して、Dewing(1971)は、創造的な子を持つ母親は、平等的な養育態度を持ち、子どもが屋外での環境に接するのを許容することを報告し、同様に、Parish(1977)も、拡散的思考を多く生み出す子どもの母親は、養育態度が寛大であることを見出ししている。

このように、母親の禁圧的でない養育態度は、子どもに多くの自由な経験をさせ、色々なものに気づかせる機会を与えるであろうし、また母親自身の自由な思考様式を、子どもが母親同一視によって無意識的に取り入れる側面も付け加えたい。

一方、このような許容的な態度に反するのは権威主義的態度であろう。Bayard, -de -volo, & Fiebert(1977)は、就学前児童の創造性と親の権威主義の間に負の相関があることを見出ししている。

また、父親の影響はどのように考えられるであろうか。Albert(1971)は、創造性の高い者の中には、父親を早期に失くした者が多いことを報告している。これを前述のBayardらの権威主義の研究と合わせて考えると、父親の威厳が子どもの自由な逸脱思考や行動を抑制していると解釈できないであろうか。

以上のように見てくると、子どもの創造性は、母親で言えば色々な刺激環境に子どもが接することを許す寛容的態度をもち、母親自身も自由な開放的思考様式をもつ場合、そして父親で言えば、禁止的な威厳を示さない場合に最も促進されるのではなかろうか。

創造性とストレス

創造性は、前述のように全人格的反応であり、しかも知能より情意的影響を強く受けるとされる。創造性は万人が共通に持っているものであり、ただそれが環境の阻害要因により抑えられているだけだとする見方もある。

アーノルドは、創造性を阻害する条件のことをmental blocks と呼び、perceptual blocks(認識の関)、cultural blocks(文化の関)、emotional blocks(感情の関)に分類し、感情の関では、不安、恐れ、フラストレーション、劣等感、自信の欠如、動機づけの不足、過度の動機づけ、理論や法則を過信すること、特定のアイデアに固執すること、対人関係における不和不信の念、特定の人間に対する同一視等をあげている。

また、阻害要因を除去し、創造性を促進する技法を唱えたOsbornのブレインストーミングをあげておきたい。ブレインストーミングでは、提出されたアイデアに対する批判を厳禁し、自由奔放なアイデアを大いに歓迎し、量を多く求めることを主眼としている。つまり、不安や恐れのない雰囲気を作り出すことと換言できよう。

さらに、Wallach & Kogan(1965)は、従来の知能テストの手続きに基づいて、創造性テストを行うことを批判し、時間制限のない自由な雰囲気を実施すべきだと主張しているし、ロジャースも開放性(openness)という概念を用い、心の閉鎖性は創造性と逆行すると主張している。最近の研究でも、Straus(1981)は、抑圧や不安が創造性の出現を阻止することを見出ししている。

以上の研究は、すべて、創造性には不安や恐れのない環境条件が必要であるとする考えである。

一方、逆に多少は不安やフラストレーションを与えた方が、創造性は促進されると主張する研究もある。Leith(1972)は、神経症傾向高一低者、さらに外向者一内向者に分類し、適度のストレス(moderate stress)を与えた条件とストレスを解除した(reduced stress)条件の2条件で

創造性を比較したところ、神経症傾向低者と内向者では2条件間で大差がないのに比べ、神経症傾向高者と外向者は適度のストレスをかけた条件で著しく得点が上昇したと報告している。これは、創造性とストレスの関係は一概に言えず、個人によってかなり様相が異なることを示している。つまり、ストレスは創造性に対して、促進的効果と妨害的効果の両面を持ち、神経症傾向や向性の質の違いによって効果が反転すると言えよう。

また、Frost (1973)は、課題を中断し報酬を与えないフラストレーション条件と、課題を完成させ報酬も与える非フラストレーション条件で創造性得点を比較したところ、有意ではないがフラストレーション条件の方が若干高い得点を示したと報告し、ストレスは創造性を阻止はしないと述べている。

しかし、ストレスがかなり強いものになるとどうであろうか。神経症傾向が高い者は、強い葛藤条件に置かれると、常同行動や神経症的固着を起こすことは、実験神経症の例からも予想しうる。思考の場合で言えば、機能的固着と呼ばれるものがそれである。

従って、ストレスの強さと創造性の間には逆U字型の関係が存在することが予想されるが、どうであろうか。拙稿(1982)では、短大生を被験者とし、強いストレス(extrem stress)と適度のストレス(moderate stress)をかけ、創造性を比較したところ、有意差はなにかえって強いストレス条件の方が高い得点を示す場合も見られた。ストレスは、かなりあいまいな概念であり、今後はいかなる種類を与えたかというストレスの内容の問題や被験者の発達段階まで考慮して、詳しく見てゆく必要がある。さらに、ストレスが動機づけを高めることも問題として残る。

創造性と学校適応

創造性の意味するものと適応の意味するものを関連づけてみると、色々な点に気づかれる。

まず、創造性ととりわけ創造的思考は、流暢性、柔軟性、独創性、具体性の4点から構成されると考えられる。この中でも柔軟性と独創性は創造性の定義の中核をなすと言える。しかし、この両者は適応との関連で多少異なる意味を持つのではないか。柔軟性は問題解決の困難な場面に遭遇した時、解決のための多角的な方法を提示してくれよう。その点では適応に貢献する要素と言えよう。一方、独創性は斬新なアイデアを出して困難を乗り越える要素を持つ反面、それが極端な形で現れると他者に受け入れられない逸脱的行動を促しやすく、社会的な適応の面では否定的な効果を及ぼすのではないか。その点に関しては今後の研究を待たねばならないが、結局ある程度のバランスは必要と思われ、独創性のみが極端な形で現れると、例えば、天才のように社会的適応が著しく低下してしまう。また拡散的思考と収束的思考のバランスのとれない子どもは、想像力は豊かであるが論理的思考ひいては自己統制力が之しく、反社会的行動や非社会的行動に走ることも考えられる。さらに、創造性の内容だけでなく、言語的創造性と動作的創造性の差、つまり創造性がどの側面に優位に発揮されるかによっても適応状態は異なる。

Kaltsounis & Higdon (1977)は、高校生で校則違反者と非違反者の2群に創造性テストを実施したところ、言語的柔軟性や独創性は違反者の方が高かったと報告している。

一方、Anderson & Stoffen (1979)は、非行少年少女と非行を犯した経験のない少年少女を比較すると、前者は、動作的創造性では劣らないが、言語的創造性では有意に劣ることを見出ししている。

Kaltsounis らの研究と Anderson らの研究は一見矛盾するように思われる。しかし、Kaltsounis らが対象としたのは中学校内で校則にそぐわない行動を示し、教師の目にやっかい者と映る者であるが、犯罪に至るほど逸脱度の高い生徒ではない。反面、Anderson らの被験者は、非行により施設に収容されていた少年であったり、裁判所から非行少年とされた少年たちであり、かなり逸脱度の高い者である。従って、両者の研究から推察してみると、学校内で、問題児と教師の目に映る程度の生徒は、言語的創造性が高いゆえに教師の規範枠に合致しないのであろうし、一方、犯罪を犯すほどの少年は、自己の内面をうまく言語表現できず欲求不満は高まり、心の統制ができないゆえ、行動の逸脱度が高くなるのではないか。

まとめと展望

最後に創造性において、一概に解釈できない問題をあげておきたい。

創造性は外界との接触の中で色々な様相を呈してくる。一般的に言えば、画一化しようとする社会的圧力にはなじまないようである。自律性、自尊心などの自己内の適応とは一致するが、社会的適応とは一致しない面が多く見られる。最近、Adaptation-Innovation Theory (適応-変革理論) が唱えられているが、適応とは自己の能動性を抑えて、外界の枠にはまることと言え、創造的革新とは相反するものであろう。

また、創造性の表出の仕方、つまり言語性と動作性の創造性は人格との関連では区別して考えねばならない。例えば、非行と創造性との関連を考える際、校則を破るくらいの適度の逸脱度の者は、言語性が豊かであるゆえ教師と折り合いがつかないのであり、犯罪を犯すくらいの非行度の高い者は、動作性が高く、行動上における過激な自己表現が社会の制約と合致しないのであろう。

一方、創造性は広い含蓄を持つ概念で、狭義には拡散的思考・直感的思考を、広義には所産・業績まで含める。その際、例えば性差を考えてみると、狭義の能力面では性差は見られないが、所産では男性の方が著しく秀れている。男女に対する期待差、性役割が創造性の成果を大いに左右しているわけで、創造的能力以上に、達成動機に代表される態度要因から、大きくは価値観までが推測される。しかし、創造性能力概念である拡散的思考と真善美を追求する変換価値 (meta values) の間には相関が無いとされ、能力概念としての創造性と自己実現的な創造性は次元が違うことが示され、今後の探究が待たれる。

以上のように見てくると、創造性の再定義も必要となるが、広義の定義をとるなら、業績にまで結びつく創造的態度からの研究も重要となろう。シュプランガーの価値類型との関連を見るのも1つの方法であろう。さらにストレスの排除や阻害要因の除去あるいは創造性の促進訓練というより、価値観や生きがいなどの創造性への意欲というマクロの観点からの促進も必要なのではないか。

参考文献

1. Albert, R. S. 1971 Cognitive development and parental loss among the gifted, the exceptionally gifted and the creative. *Psychological Reports*, 29, 19-26.
2. Anderson, C. M., & Stoffer, G. R. 1979 Creative thinking and juvenile delinquency ; A study of delinquent and nondelinquent youth on the Torrance tests of creative thinking. *Adolescence*, Vol. 14. No. 53. 221-231.
3. Bayard-de-volo, C. L., & Fiebert, M. S. 1977 Creativity in the preschool child and its relationship to parental authoritarianism. *Perceptual and Motor Skills*, 45, 170.
4. Bishop, D. W., & Chance, C. A. 1971 Parental conceptual systems home play environment and potential creativity in children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 12, 318-338.
5. Bloomberg, M. 1971 Creativity as related to field independence and mobility. *Journal of Genetic Psychology*, 118, 3-12.
6. Cohen, S., & Oden, S. 1974 An examination of creativity and locus of control in children. *Journal of Genetic Psychology*, 124, 179-185.
7. Couturier, L. C., & Mansfield, R. S., & Gallagher, J. M. 1981 Relationships between humor, formal operational ability, and creativity in eighth graders. *Journal of Genetic Psychology*, 139, 221-226.
8. Dellas, M. 1978 Creative personality and identity. *Psychological Reports*, 43, 1103-1110.
9. Ducette, J., & Wolk, S., & Friedman, S. 1972 Locus of control and creativity in black and white children. *Journal of Social Psychology*, 88, 297-298.
10. Dewing, K. 1973 Some characteristics of the parents of creative twelve-year-olds. *Journal of Personality*, 41, 71-85.
11. Fashingbauer, T. R., & Eglevsky, D. A. 1977 Relationship of dogmatism to creativity: Origence and intellectence. *Psychological Reports*, 40, 391-394.
12. Frost, K. B. 1976 The effects of frustration on the figural creative thinking of fifth grade students. *Journal of Experimental Education*, 44, 20-23.
13. Gaudio, A. C. D. 1976 Psychological defferentiation and mobility as related to creativity. *Perceptual and Motor Skills*, 43, 831-841.
14. Glover, J. A., & Sautter, F. 1977 Relation of four components of creativity to risk-taking preferences. *Psychological Reports*, 41, 227-230.

15. Gollan, S. E. 1962 The creative motive. *Journal of Personality*, 30, 588–600.
16. Gopal, A. K., & Sharma, V. K., & Singh, A. K. 1980 Motivational differences among high and low creative university students. *Psychologia*, 23, 240–246.
17. Guilford, J. P. 1967 *The nature of human intelligence*. Mcgrow–Hill.
18. Kaltsounis, B. 1976 Personality traits associated with originality and elaboration. *Psychological Reports*, 38, 1079–1082.
19. Kaltsounis, B. 1979 Black students' personality traits associated with originality and elaboration. *Psychological Reports*, 44, 83–87.
20. Kaltsounis, B., & Higdon, G. 1977 School conformity and its relationship to creativity. *Psychological Reports*, 40, 715–718.
21. Katz, A. N., & Poag, J. R. 1979 Sex differences in instructions to "be creative" on divergent and nondivergent test scores. *Journal of Personality*, 47, 518–530.
22. Kirton, M. 1978 Field dependence and adaptation–innovation theory. *Perceptual and Motor Skills*, 47, 1239–1245.
23. Kumar, G., & Raina, M. K. 1976 Creative behavior and achievement motivation. *Psychological Reports*, 39, 766.
24. Lieberman, J. N. 1965 Playfulness and divergent thinking; An investigation of their relationship at the kindergarden level. *Journal of Genetic Psychology*, 107, 209–224.
25. Leith, B. G. 1972 The relationships between intelligence, personatity and creativity under two condition of stress. *British Journal of Educational Psychology*, 42, 240–247.
26. Lett, W. R., & Williams, A. J., & Poole, M. E. 1979 The achievement drive and ego strength of highly creative adolescents. *Journal of Psychology*, 102, 263–266.
27. Mathes, E. W. 1978 Self–actualialization, metavalues, and creativity. *Psychological Reports*, 43, 215 – 222.
28. Maxwell, B. A., & Reilley, R. R. 1978 Creativity, satisfaction, and orientation of college freshman. 42, 859–864.
29. Parish, T. S., & Eads, G. M. 1977 College student's perceptions of parental restrictiveness/permissiveness and student's scores on a brief measures of creativity. *Psychological Reports*, 41, 455–458.
30. Patel, K. 1976 Profiles of creative personality. *Psychologia*, 19, 173–183.

31. Poole, M. E., & Williams, A. J., & Lett, W. R. 1977 Inner-centeredness of highly creative adolescents. *Psychological Reports*, 41, 365-366.
32. Ridley, D. R. 1977 Preference for stimulus complexity and architectural creativity. *Perceptual and Motor Skills*, 45, 815-818.
33. Silvestro, J. R. 1977 Effects of divergent and convergent thinking tasks on need for novelty. *Perceptual and Motor Skills*, 44, 306.
34. Straus, H., & Hadar, M., & Shait, H., & Itskowitz, R. 1981 Relationship between creativity, repression, and anxiety in first graders. *Perceptual and Motor Skills*, 53, 275-282.
35. 田辺敏明 1982 ストレスが創造性に及ぼす影響 — 神経症的傾向及び向性との関連において — 中国四国心理学会論文集, 第15巻, P83.
36. 田辺敏明 1983 幼児の創造性に関する文献的研究 高松短期大学研究紀要第13号, P45~54.
37. Torrance, E. P. 1970 Encouraging creativity in the classroom. Brown, C. P., P102. (扇田博元監訳『創造性と学習』明治図書, 昭和46年)
38. Wallach, M. A., & Kogan, N. 1965 Modes of thinking in young children. Holt, Rinehart, and Winston, New York.
39. Ward, W. C. 1969 Creativity and environmental cues in nursery school children. *Developmental Psychology*, 1, 543-547.

<Summary>

A review of the relationship between
creativity and personality

Toshiaki Tanabe

This review intends to describe the personality traits associated with creativity, and further refers to its relationship to not only interests and needs but also to the problems in ego-identity and adjustment to school.

Some interesting points were elucidated as follows:

Creative persons prefer to the simple stimuli which can be grasped as a gestalt.

Creativity is not compatible with ego-identity.

Highly deviated students excel in figural creativity rather than verbal creativity, but moderately deviated students excel in verbal creativity rather than figural creativity.

高松短期大学研究紀要

第 14 号

昭和59年3月15日 印刷

昭和59年3月25日 発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社
高松市東山崎町596番地